

『信仰の土台』(要旨)

聖書箇所：Ⅱテモテ 3 章 14 節～17 節

本朝は「宗教改革記念日」です。1517 年 10 月 31 日にマルティンルターがヴィッテンベルクの城教会に 95 ケ条の論題を張り出した事が宗教改革の発端となりました。宗教改革は「聖書のみ」(*sola Scriptura*) と聖書の権威を回復させました。その聖書から「信仰の土台」を学びます。

【1】けれどもあなたは…

信頼した人にだまされた人は人間不信に陥るでしょう。そうした経験は、誠実に生きることが馬鹿らしく思わせたり、自分がされたように人をだますきっかけとなる場合があります。詐欺師は、だます相手をよく観察し金や品物を奪い取ります。彼らは対象とする人の反応を見極め、柔軟に出方を変えるのです。

パウロはテモテにそうした詐欺師や悪い者たちの振る舞い(Ⅱテモテ 3:1-9,13)に引きずられてはならないと勧めます。「…けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい」(3:14)

なぜでしょうか。それは、悪い者たちや詐欺師たちは、悪事を働く対象によって容易に自分の立ち位置を変え一時的な利益を得ます。そして自分が人をだましたように自分もだまされて、ますます悪に落ちていくからです。悪い者たちに対して悪で立ち向うならば、悪に取り込まれます。陰口に対して陰口。暴力に対して暴力。その連鎖は際限なく膨張します。パウロはテモテに、周りの人がどうであれ、あなたは、学んで確信した聖書の教えにとどまりなさいと命じました。祖母、母、そしてパウロから「聖書」を学んだテモテに対して、すでに学んだことに生きるようにと励ましたのです。



とが出来ない」と言った考えを退けます。

次に、聖書が生活の基準であることについてです。聖書は、人がどのように正しく生活するかという教え、戒め、矯正、義の訓練を私たちに指示する書物です(3:16)。これまでの長い歴史の中でキリスト者は聖書を基準に自らの歩みを吟味してきました。ルターは言います。「すべての霊は、教会の面前において、聖書を基準として、吟味されなければならない。なぜなら、聖書が太陽よりもはるかに明るい霊的な光であって、特に救いや、生活基準を知るための光であるということは、クリスチャンにとっては、何よりもまず必要とされ、無条件の真理として保持されなければならないからである」(『マルティン・ルターの神学』)

こうした聖書は、いわゆる人間の叡智が結集した書物ではありません。万物は「神の息吹」によって創造されました。「主のことばによって天は造られた。天の万象もすべて御口の息吹によって。」(詩篇 33:6)

それと同じように、「聖書はすべて神の靈感(*脚注「神の息吹」)によるもので…」(Ⅱテモテ 3:16)と、聖書は「神の息吹」によって生み出された「神のことば」なのです。ゆえにパウロはテモテに「神のことば」である聖書に信頼し、そこに堅くとどまるよう命じたのです。

【2】聖書とはどういう書物なのか

なぜパウロは「聖書」の教えにとどまるよう命じたのでしょうか。それは、聖書が全ての事柄、すなわち信仰と生活の基準であると確信していたからです。

まずパウロは、聖書が信仰の基準であると述べます。「聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます」(3:15)。聖書は人が救いを得るために必要なことを全て教えていると言うのです。「聖書だけでは救いの全容を知るこ

【3】聖書に聞き、学び、従う

パウロはみことばを学び、それに従う人を「神の人」(3:17)と呼びました。神様のために良い働きをしたいと願う全てのキリスト者に、聖書に聴き、学び、そして従うようにと勧めているのです(参照: I テモテ 6:11)。悪い者たちや詐欺師は目の前の利益を追い求めます(Ⅱテモテ 3:1-9)。しかし「神の人」は、そうしたものに振り回されるのではなく、みことばに信頼します。聖書は、みことばに信頼する人の揺るがない「信仰の土台」です。